

大寒波。日本も荒れたそうですが、欧州もかなり寒かった…。日中でも氷点下が続く日々。約3週間に及ぶ滞在中、「この冬一番の冷え込み」に何度も見舞われ、寒い思いをしてきました。さて、今月号ではドイツ&イタリアの報告をさせていただきます。あまりに中身が濃かったので、拡大版になっております。どうか最後までお付き合いください。

私たちが日本を発ったのは1月19日。まずはイタリア・ミラノに到着しました。今回の旅行が決まったのは、私エリが通訳の仕事を引き受けたため。そして、子供たちが入学してしまうとなかなか一緒に長い旅をすることができないので、最後のチャンスと思って家族で行くことにしました。友人がアリタリア航空のステewardessさんなので、イタリア経由で。私の従姉妹がヴェローナという町に家族で赴任しているのも決め手でした。子供たちは、ステewardessさんは可愛がってくれるし、座席の前に一人ずつスクリーンがついているし、楽しすぎて12時間のフライトを一睡もせずに過ごしました。



翌日、ミラノの大聖堂へ。地下鉄を出たとたん、「わぁ！」と歓声を上げる子供たち。そうかそうか、子供心にもこのすごさが分かるのか、と嬉しく思った瞬間「鳩だぁ！！」と（笑）。大聖堂には目もくれず、ひたすら鳩を追いかけ回す3人。先が思いやられます…。イタリアはコソ泥が多いので注意していたつもりだったのですが、中央駅でさっそくスリにあってしまいました！が、なんと奇跡的に無傷！お金がほとんど入っていなかったためか「これ落ちてたわよ」と盗った本人とおぼしき女性がうつむき加減に返してくれたのです。ブーツの底の取れかかった髪を振り乱した母親が、子供を3人も連れていたため、同情を誘ったのでしょうか（笑）。



さてさて従姉妹宅に耕太と子供たちをさっさと置き去りにし、私は一足先にドイツへ出稼ぎに。視察旅行の通訳です。テーマは「バイオエネルギー村」。地域にある資源の見直しに取り組んでいる「菜の花プロジェクトネットワーク」という滋賀県のNPO法人が呼びかけて、10名が参加。再生可能な資源の利用活動に取り組まれている方が4人、行政マン4人、議員さん2人。何と熊本県庁からも3人が参加してくれま

した。農村でとれる再生可能な資源で、自分たちが必要なエネルギーを生み出す、というエネルギー自給集落が初めてドイツに誕生したのは8年前。その村を日本人が初めて訪れたのも、当時私が企画した視察でした。その後バイオエネルギー村は大きな広がりを見せ、今ではドイツ国内に80か所近くもあるというのです。その中から、去年「バイオエネルギー村大賞」を受賞した3つの集落を訪ねました。人口300人前後の小さな所ばかりでしたが、「自分たちの使うエネルギーは地元の資源で作っている」という自負が非常に強く、とても刺激的でした。

バイオエネルギー村の仕組みを簡単にご説明します。エネルギー自給のコンセプトを作ったのは大学の研究者グループ。日本の減反に当たる「休耕地」でエネルギー用の作物を育て、家畜の糞尿と共に発酵させることでメタンガスを発生させ、そのガスで発電（バイオガス施設=写真私の後方）。作った電気をそのまま集落で使うのが理想的ですが、現状では売電価格の方がずっと高いため、いったん売ってから使う分は買い戻します。発電時に熱が生じるので、その熱でお湯をつくり、地中に埋めたパイプで集落内の各家庭に熱を届けます。冬場は排熱だけでは足りないので、集落内の山から切ってきた木をチップにして地域暖房施設（大きなセントラルヒーティングみたいなもの）で使います。右の写真は、木のチップを大切にしてくれた地元農家さん。各家庭にボイラーと燃料を置かなくてよくなったため、地下室が有効に使えるし、使う分だけの熱を買うことができるので光熱費の節約にもなっているそうです（約半分から1/3に減った世帯も）。このような取り組みをするに当たって、大学の研究チームが最初から心がけていたのは、住民による住民のための取り組みである、ということをはっきりさせること。そのため、何度となく住民集会を繰り返しながら、実現の可能性が高い場所を絞っていったそうです。とても刺激的な視察内容だったので、近い将来、熊本でも何らかの形で実現できることを期待しているところです。



通訳兼旅行ガイドは非常に神経を使うたいへんな仕事ではありますが、今回は私にとっても大変参考になる内容だったので、疲れを感じることなく濃密な1週間を過ごしました。家事と育児から解放されたのも良かった（笑）。一方で、子守り役の耕太はずいぶん大変な思いをしたようです。私と離れた1週間の間に子供たちが相次いで風邪でダウン。私が仕事を終えて合流したときには、かなりお疲れの様子で「休暇というより修行だね」との一言でした。

それでも、ミュンヘン近郊では留学時代の友人たちや恩師と会ったり、博物館に行ったり。恩師というのは、私たちが農業をしてもいいかな、と思う直接のきっかけを作ってくれたミュンヘン工科大学のアマ - 先生。すでに退官されていますが、教鞭をふるいながら、有機農業を営んでいた名物教授でした。自然保護や農業の多面的機能（水や空気を守ったり、癒しの場を提供したり）の事を教えてくれていたのですが、ある時学生たちを自宅に招待し、自らが栽培した小麦を製粉し、焼いたパンを振舞ってくれたのです。農場の一部はビオトープ。言うこととやることが一致しているというのはこんなにもかっこいいんだ、という印象を私たちに与え



てくれました。農村の美しさを守っていき
たいというのが、就農当時から抱いている
私たちの夢なのですが、自ら耕しながら「農
村景観を守ろう」と訴えていきたいと思っ
ています。耕すからこそ分かること。耕す
からこそ守れるもの。それを大切にしたい
と思わせてくれたのは、他の誰でもなくア
マー先生でした。今年就農して10年目。
次の10年に向けてという事をよく夫婦で
話しているのですが、先生との10年ぶりの
再会は、私たちにとってまた大きな力を与
えてくれました。

ミュンヘンの後はフランクフルトに移動。幼馴染と再会しま
した。私はフランクフルト郊外で生まれたのですが、母が入院
中に親しくなったという家族とずーっと交流があり、同じ病院
で生まれた正真正銘の「幼馴染」と37年越しのおつきあいをして
いるのです。生まれ故郷なのに言葉も文化も分からない、と
いうのは、私にとって留学をめざす大きな動機でした。今回は
お互いの子供同士も仲良くなり、3世代目のおつきあいにつなげ
ることができました。大切にしたい縁の一つです。



そして最後に訪れたボンの家族とも不思議な縁でつな
がっています。私たちが住む古民家には、かつて大津ヨ
ハナさんというドイツ人女性が住んでいました。この家
のご長男さんは、ドイツで生活していたことがあり、そ
の時にヨハナさんと結婚。終戦間際にシベリア鉄道で南
阿蘇に帰ってきました。ヨハナさんは若くして亡くなら
れましたが、耕太のお父さんや叔母さんは子供の頃、隣
の家に住む「ハナ子」さんにケーキやパンを食べさせて
もらったことを覚えているそうです。ヨハナさんにお子
さんがいなかったのも、私たちが入居した時、荷物はそ

のまま。故郷を離れて孤独な思いをしていたヨハナさんを励ます手紙やナチスの印鑑が押され
た免許証、戦時中の新聞等々、ドイツ語が分かる私たちがここに住むことになったのは、これ
らを整理するために呼ばれた、と思えました。8年前にドイツを訪れた折、ヨハナさんの親戚
探しに取り組みました。手掛かりは古い手紙と写真だけ。消印を頼りに北ドイツの田舎を訪れ、
そこで年老いた元区長さんから「この人の家族を知っている」と言われた時には鳥肌がたちま
した。私たち世代には過去の歴史の話であり、モノクロだった第二次大戦という時代が、急に色を持
って目の前に現れた感じ。ヨハナさんのご兄弟は既に亡くなられていましたが、ヨルクさんという甥っ
子さんの名前が分り、ネットカフェで電話帳を検索したところ60人の同姓同名。私たちに残された滞在
時間はあと2日。やれるところまでやろうと腹をく
くり、手当たり次第に電話をかけはじめたところ不
在が多く、最初につながった電話で「ヨハナ・オオ
ツという女性をご存じではないでしょうか」という
私の問いに、一瞬の空白の後「それは私の叔母です」



という答え。耳を疑った瞬間でした。車をとばし、早速会いに行った私たちを旧知の友のように暖かく迎えてくれたヨルクさん。その翌年、娘さんのウテさんが日本にお墓参りに来てくれました。その直後に私たちが子宝を授かったのは、ヨハナさんからのご褒美だったような気がしてなりません。こうして復活した不思議なご縁。こちらのお宅でも、子供同士がすぐに仲良くなり、次の世代に繋げたことを嬉しく思いました。



今回改めてドイツの町並みの美しさと家のきれいさに感動。住んでいた当時はその感動が薄れていたのですが、とにかくどこに行ってもきれい！それは視察に参加された皆さんも口をそろえて言っていました。条例で厳しく規制している、という事実はありますが、その条例がそもそもできたのも、ごちゃごちゃしているのが嫌いなドイツ人社会ならではの。日本は自然景観が美しいところはたくさんあるのに、そこに全く協調性のない建造物や看板があることが多すぎて…。写真を撮る角度に苦労する、と思われることはありませんか？何でもかんでも

日本はダメでドイツがいい、なんて思っていませんが、景観に関しては見習いたいところがたくさん。美しい町並みはそれだけでも財産であることが理解してもらえるよう、できる努力をしていきたいと思います。

最後には私もダウンと、風邪に苦しみはしたものの、3人の子連れの旅はなんとか成功で、とても収穫の多い旅でした。子供たちは英語やドイツ語、イタリア語を少しずつ覚えて得意げ。訪問した先々で日本食を作ったので、ドイツの食事に飽きると言う事もなく、懐かしいビールやワインも堪能してきました。ドイツは寒いのですが、いったん家の中に入ればトイレでも廊下でも暖かいのが魅力。かたや我が家の古民家は冬になるとストーブのある部屋以外は外気と同じ。家の快適性について改めて考えさせられました。長くなりましたが、充実していたドイツ・イタリアの旅報告、いかがでしたでしょうか。来月からはまた南阿蘇の暮らしや様子をお伝えします。皆さまどうぞお元気でお過ごしください。

